

学術・文学

高草木光一 編
連続講義
一九六〇年代 未来へつづく思想
2・25刊 A 5判304頁 本体2500円
岩波書店



棄てられた「いのち」の「六〇年代史」をとらえなおす
「3・11」後に示唆を与えるラディカルな思想群
とよだもとゆき

三月一日の東日本大震災で発生した原発事故は、時代を画す「公害」となってしまう。今も被害が拡大している。
そもそも公害が目されるようになったのは一九六〇年代、高度経済成長期のことだ。当時ハイテク技術で国策企業だったチッソが水俣病を引き起こし、「公害の原点」と言われるようになる。一方、石油へとエネルギー政策が大転換され石炭産業が斜陽となるなか、三井三池炭坑で炭塵爆発事件が起こった。六〇年安保闘争と期を同じくした大争議から、三年を経てのことだ。
合理化が強力に進められる一方「安全神話」のもと保安対策が怠られ、起こるべくして起こった大事故だ。爆死者二〇人、一酸化炭素中毒死者四五人、中毒患者八三九人と戦後最大級の労働災害をもたらした。辛うじて生き残

った中毒患者は脳をやられ、家族もその重みを背負った。今回の原発事故もまた、エネルギー政策の転換期に国策企業で発生した。どこまで拡大するか、判断を許さない大公害である。
本書は昨年慶応大学で行われた連続講義のまとめだが、「三・一一」後の社会をわたしたちがどのように再構成するべきかを考えるとき、大きな示唆を与えるものになっている。
「一九六〇年代の節目となる事件や運動の主役であった四人」の発言が並んでいる。
ベ平連(ベトナムに平和を!市民連合) 吉川勇一「原発水爆禁止運動からベ平連へ」、水俣病や三井三池炭塵爆発事故に取り組んだ医師原田正純の「水俣と三池」、東大闘争を闘った環境哲学者最首悟の「東大闘争と学生運動」、三

里塚闘争と脱原発運動を担ってきた市民科学者山口幸夫の「三里塚と脱原発運動」。企業画し講義を編んだ高草木光一は、「高度経済成長期の陰で棄てられた「いのち」に焦点を当てた一九六〇年代史を志向した」と、狙いを明らかにしている。
四人の話は、「六〇年代」の記録・追想にはとまらな。今日、いま「三・一一」後の課題に直結している。真御可能」であるとする「科学技術文明」や、「生産性の論理」「労働の論理」への疑義・批判である。裏側から言っておせば、そうした文明や論理から閉め出され排除され、「棄てられたいのち」と向きあおうとする姿勢である。水俣病や、一酸化炭素中毒で障害を背負われた「いのち」、ダウン症の娘と接する最首悟の「魂と気配としてある形のない」「いのち」、三里塚闘争の当の「百姓衆が獲得した食や暮らしにおける「いのち」のつながり。
ここで語られる「いのち」とは、わたしなりに受けとめれば、自然や世界をすべて制御できると思ひなし「地球の主人」(ハンナ・アレント)たらんとする近代的「人格」「理性」へのアンチ・テーゼとしてある。自然に支えられ、自然とつながり息づく、自らも自然にすぎない「いのち」。逆に、そこに普遍的でラディカルな輝きがあることが静かに語られている。
ヘーゲルは「人格」と「身体を分け、前者が後者を所有し精神化すること」で理性を獲得できるとした。そこに「自由」を見いだした。西歐的知の「自由」は、身体、自然、世界を制圧・支配することで表現できるものであり、すべては「制御可能」なものとしてある。いや、そうではない。
この世界観を支える科学技術が六〇年代の高度経済成長を推し進めたが、経済発展優先はさまざまな抑圧、排除、切り捨てをもたらした。そうしたなかで、水俣病、ベトナム反戦運動、学園闘争、三里塚闘争、科学技術への異議申し立て(反原発)など、六〇年代の事件、運動が起こり、闘われたことが論者たちによって明らかにされる。
もちろん多様な「六〇年代」が本書にすべて集約されているわけではない。半世紀の経過は状況を大きく変えている面もある。しかし、「制御可能」神話が崩れた「三・一一」後を模索するとき、「未来へつづく思想」として「六〇年代史」を改めてとらえなおす意義はまことに大きい。(スローワーク・シャナリ)

1-101-0051 東京都半田区神田神保町2-34
電話03(3234)2471 FAX03(3261)4857
購読料(45税別)1年4980円11520円
半年2490円 振替00160-9-73883
http://yoshoshimbun.jp
定価 240円
(本体229円)
発行 (株)図書新聞